

私を照らすひかりの言葉

はじめに

本書『私を照らすひかりの言葉』は、飛驒一円のご家庭に毎月届けられる真宗の機関誌「ひだご坊」に、平成26年1月号より、平成30年9月号まで、「家族で語ろう」という企画コーナーにて隔月で掲載された文章をまとめたものです。

本書を手取る有縁の方々へ

ぜひ、ご自分の身に引き当ててお読みください。

そして、隣にいる方と、本書からのメッセージを受けて感じたことを語り合ってください。

さて、あなたを照らすひかりの言葉は、なんですか？

- 経教はこれを喩うるに鏡のごとし 4
- 人生一生酒一升 あるかと思えば もう空か 6
- 人間が自分の頭に正義という名をつけたら どんな残酷なことでも出来る 12
- 正しさの名のもとに 人は道を間違う 18
- いのちには願いがある 24
- 墮ちる地獄は恐ろしく思えども その地獄を己の心つくるを知らぬ 30
- 大悲倦きことなく 常に我を照したまう 36
- 自分の身を守る 目に見えない針 42
- 涙の出るようなご縁に遇わないと 仏法は響かない 48
- 国豊かに民安し 兵戈用いることなし 54
- つみを けしうしなわずして 善になすなり 60
- 亡き人へいいところへ行くんだよと言う そいう私はどこへいくんだらう 66
- 救いとは 過去が救われるということ 72
- わがごころのよくて ころさぬにはあらず 78
- 外儀のすがたはひとごとに 賢善精進現せしむ 貪瞋邪偽おおきゆえ 奸詐ももはし身にみたり 84
- であいなおす であいつづける 90
- 御同朋・御同行とこそかかずきておおせられけり 96
- 自分さえよければいい この悲しさ 102
- 皆一人ひとりが 瞬間湯沸かし器の種火を持っていてということ 108
- 人生の宿題 114
- 終点は新たな出発点 120

経教はこれを喩うるに鏡のごとし

自分のことは自分が一番よく知っている、と人は言います。しかし、それは本当でしょうか。実は人類始まって以来今日まで、人は自分の顔すら自分の目で直接見たことがないのです。なぜなら、目は外を見るためについているからです。自分の本当のすがたを知らないもの、人間。仏さまは、そのような闇を抱える私たちを、絶えず照らし続けています。まるで鏡のように。

経教はこれを喩うるに鏡のごとし、しばしば読みしばしば尋ねれば、智慧を開発す

(善導大師)

教えは鏡です。教えの鏡は、私のすがたや私の心までをも、きちんと言い当て、照らし続けています。そうして人は、新しい世界に出会い続けていくべき存在なのです。

(二〇一三年十二月掲載)

経教は

これを

喩うるに

鏡のごとし



人生一生 酒一升いっしょう あるかと思えば もう空かから

時の流れは早いもので、お正月から一か月が過ぎようとしています。ところでお正月は、いつもよりお酒を飲む機会が増えるものです。この時のためにとっておきのお酒をあけた方もおられたのではないのでしょうか。家族そろってまず一杯。おせちとともにまた一杯。新年を祝ってまた一杯。理由もつけずにもう一杯。こうしていつのまにか酔っぱらいの私が完成していきます。

人生一生 酒一升

あるかと思えば もう空か

作者不詳のこの言葉は、今までにお寺の掲示板に掲示した言葉の中でも、特に

反響の大きかった言葉です。人間の一生と一升瓶びんをかけたこの言葉に、多くの人々が「本当ですね」、「実にうまいことを言いますね」と感想を語っていかれました。きつと思いがたることがあるのでしょうか。身に覚えがあるからなのでしょう。ただたくさんあると思っていた一升瓶のお酒が、いつの間にか空っぽになっていく。まさに言い当てられるようにしてうなずかざるを得ない事実です。

私が言い当てられるということは、とても大切なことです。教えの言葉もしばしば私のことを言い当ててくれます。自分ではまったく気がつかなかった私のがたを照らし出すのです。教えを聞くということは、私の事実を言い当ててくれる言葉と出会うということなのかもしれません。

時の流れは、ひとときもとどまることはありません。人の一生もまたかくのごとし、です。一年はあつという間に過ぎていきます。誰もがまるで見ないかのようにしていますが、私たちの生は確実に終わりに向かってつきすすんでい